

考古学教育の十年

藤 井 直 正

一 は し が き

今年、昭和六十一年は、わが大手前女子学園が、大阪市東区大手前の地に創設されてより四十年、西宮市夙川の畔に大手前女子大学が開学してより二十年の佳き年に当たる。

昭和五十一年からこの学園に奉職させていただいた私の経歴も、ちょうど十年を数えることになった。想起してみると、故川勝政太郎先生のご推せんで、昭和五十一年四月から、大手前女子大学の非常勤講師として考古学の講座を担当し、昭和五十二年四月には史学科の専任講師に採用していただいた。

以来十年、学園四十年の歴史の中では四分の一、大学二十年の歴史の中では二分の一という短い歲月ではあるが、私の担当科目である考古学の世界を中心に、私なりの抱負と計画を持ってこの十年間を過ごして来たつもりである。

日本全土を席捲する開発の波に乗って、発掘調査が全国の各地でさかに行なわれている。都道府県・市町村には専従の職員が配置され、大学に在職・在学する考古学者や学生達も、これらの調査に何らかの形で参加させられているというのが現状である。昭和二十三年に創立された、全国考古学者の連合組織である日本考古学協会の会員は、今春二千名を突破した。もって、その盛況ぶりがうかがえるであろう。

また、各地における発掘ニュースは、ほとんど毎日、どこかの新聞の社会面に取り上げられ、トップ記事を飾ることさえめずらしくない。こうした状況は、専門家ばかりでなく、一般の人びとも考古学に強い関心や興味をひき起こす動機となり、発掘調査の現地説明会や、報告会、

講演会には、多数の人びとが参加されるといふ、いわばブームとなっているのである。

さて、こうした考古学界の現状の中で、大学における考古学の研究、あるいは教育はどうあるべきなのか。という問題について、今こそ原点に立ちかえって真剣に考えてみる必要があるのではないだろうか。こうしたことについては、多くの先学が、すでにさまざまな機会にとり上げられていることではあるが、一つの大学にあって、十年の間、考古学の研究と教育に携って来た私には、反省の意味もふくめて私なりの歩み方と意見がある。それは、女子大学であるという条件と環境には、それなりの制約があり、その反面利点のあることも確かであるからである。

本稿は、大学における考古学はどうあるべきか、といった大問題に取り組むほど大げさなものではないが、過去十年、私のたどって来た足どりの中から、仮りに「女子大学における考古学へのアプローチ」と言ったテーマを設定して、それを模索してみようという試みである。

二 大学における考古学

わが国における考古学教育の歴史は、東京帝国大学文学部に学び、西洋史学を専攻された浜田耕作(青陵)博士によって、京都帝国大学(現在の京都大学)文学部に考古学の講座が設けられたことにはじまり、それは明治四十二年(一九〇九)のことであった。

東京帝国大学(現在の東京大学)においても、大正初年から原田淑人博士によって考古学の講義が行なわれていたが、講座が正式に文学部に設けられたのは昭和に入ってからのことである。このころから、東北・九州・京城・台北の各帝国大学のほか、慶応・国学院・早稲田等、私立の各大学にも考古学の講座が設けられ、大学を中心とする考古学の研究と教育が発達して来た。

昭和二十年の敗戦以後、科学的な歴史の解明のため、考古学は一躍脚光を浴びることになった。これに呼応して、昭和二十四年、新しい学制のもとに発足した、いわゆる新制大学においても、考古学の講義・講座が設けられるようになった。以後四十年近くを経た現在、全国の各大学における考古学の講義・講座の開設数は年々増加の一途をたどっている。

最近刊行された、日本考古学協会編の『日本考古学年報』(一九八四年版)を見ると、旧帝国大学では、北海道・東北・名古屋・京都・大阪・九州の各大学に、また、次表に見られるように、国公立・私立を合わせて全国でちょうど一〇〇の大学に考古学関係の講義・講座の開設されて

いることがわかる。

地方別	国公立	私立	計
北海道	二	三	五
東北	六	二	八
関東	一〇	二一	三一
中部	一〇	三	一三
近畿	九	一七	二六
中国・四国	四	五	九
九州	五	三	八
計	四六	五四	一〇〇

もつとも、これは報告されたデーターでの集計であるため、遺漏が多いように思われ、実際の数はこれよりも上回ることが予想されるが、おおよその傾向は知ることができる。

このように、これら各大学における研究活動が、日本考古学ばかりでなく、世界諸地域の考古学的解明に大きく寄与し、それを支え、推進する幾多の人材を送り出して来たのである。

ところが、この数字は講義・講座の開設されている大学の数であって、各大学における内容は多様である。国公立・私立をふくめて、教授・助教授・講師・助手を揃えた陣容をもち、概説・特講・各論さらに演習・実習を合わせて各種の科目が開講され、専門の考古学者を養成する目的で編成されている大学から、教授又は講師一人で概説のみが開講されている大学、あるいはその中間的なものまでさまざまである。文学部で史学科のおかれている大学では、たいてい考古学の講座の開かれていることが普通であるが、大学によっては、一般教養の科目とされているところもある。

ところで、私は本稿の標題に「考古学教育」という言葉をかかげた。一般にエドワード・モースによる東京都大森貝塚の発見・発掘をもって科学的な意味での日本考古学のはじまりとされている。以来百年をこえる日本考古学史の中で、「考古学研究」という言葉はあっても、「考古学

教育」という言葉はかつて使用されたことがなかった。それなら、日本考古学の歴史の中に「考古学教育」と言えるような教育的要素がなかったかという点、そうではない。現に、京都帝国大学では考古学教室とよばれ、先に触れたように、過去から現在に至るまで大学で考古学の教育が行なわれて来たのである。

歴史一般に目を移して見ると、「歴史学研究」もしくは「歴史研究」という言葉に対して、「歴史教育」という言葉が存在している。にもかかわらず、「考古学教育」という言葉・字句がなぜ存在しなかったのだろうか。また、これまで多くのすぐれた先学がおられながら、どうしてこのことに気付かれることもなく、指摘されることもなかったのだろうか。一見不思議とも思えるこの一つの事実の中に、日本考古学のたどって来た道と、現在考古学界の当面している諸問題の原点が秘められているように私には思えるのである。

私なりの解釈をして見ると、日本考古学史の一部門を占める大学の考古学講座が、考古学研究の専門家を養成することに重点がおかれていたことに起因しているであろう。これを追跡してみると、本稿の主題ではないが、考古学が広く一般の人びとにつながりを持ち、国民的・社会的な学問として解放され、一般の人びとに理解と関心を持たれるようになったのは、戦後のことである。というよりも、不幸なことに、高度成長経済の波に乗って開発事業が全国的にひろがり、それに伴う発掘調査と相次ぐ遺物の発見が国民的課題となった昭和三十年代以後と言っても過言ではない。

極端な言い方をしたら、現在においても、全国各大学で開講されている考古学の講座は、考古学の専門家、あるいは発掘調査の技術者を養成することに重点がおかれていると思う。もちろんすぐれた研究者が次々と成長して大きな業績をあげられ、考古学が日進月歩していることを否定しているのではない。

私が敢えて「考古学教育」と言っているのは、こうした専門の考古学者や技術者を養成するのではなく、大学にあっても、もう少し広い範囲を対象とする、いわば「一般教育」の中の考古学、あるいは一般の人びとを対象とする「社会教育」の中の考古学を指しているのである。日々の体験を通じて、またこれからの社会のために、「考古学教育」と呼ばれるものが必要であると常々私は思っている。

三 私の考古学教室

昭和四十一年に創立された大手前女子大学は、文学部のみ単科大学で、当初は哲学科と英米文学科の二学科で発足した。昭和四十四年から史学科が開設され、昭和五十年には、哲学科が美学美術史学科と改称された。

考古学の講座は、昭和四十四年に史学科が開設されるとその必修科目となり、当初は小谷仲男助教授が、その後川勝政太郎教授が担当されることになった。本学では他学科の講義の受講が認められ、選択科目の履修単位に加えることができるから、美学美術史学科・英米文学科の学生の受講も可能である。また、昭和五十年度には博物館学芸員の養成課程が設けられたが、考古学は美術史（本学では日本美術史・東洋美術史・西洋美術史の三科目がある）・民俗学と共に専門科目としてこのうちの二科目を履修しなければならないことになっている。

こうした中で、はしがきに述べたように、昭和五十一年度には、非常勤講師として、昭和五十二年以降は専任講師として考古学の講義を担当して来た。その内容については後述するが、通年四単位の講義という限られた時間の中で、多岐にわたる考古学の各分野、諸問題を取り上げることが不可能である。そこで、さらに考古学に興味を持つ学生に対して、よりくわしい講義をしたいと考え、川勝政太郎先生に意見を述べた。当時史学科の主任であった今井林太郎先生とご相談いただいた結果、史学科の選択科目として新しく講義を開設することになった。従来の考古学を「考古学Ⅰ」、新しい講義を「考古学Ⅱ」として昭和五十二年度から出発したが、Ⅰ・Ⅱではわかりにくいので、昭和五十四年度からは「考古学概説」と「考古学特講」とよぶことになった。さらに昭和五十八年度から「考古学演習」を開設したが、昭和五十九年度から「考古学実習」として、それぞれ現在に及んでいる。従って、現在、大手前女子大学において開設されている考古学関係の講座は、次の三科目である。

科目名	必修・選択の別	単位数	履修学年
考古学概説	史学科必修科目 他学科選択科目	四	二
考古学特講	史学科選択科目	四	三・四
考古学実習	〃	二	三・四

考古学教育の十年

以下、この三科目について、これまでやって来た内容と、いくつかの問題点を提示して見ることにする。

1 考古学概説

一口に考古学といっても、その範囲は広く、対象とする地域からは、日本考古学・東洋考古学・西洋考古学等に分けられ、時代区分においては、古い用語で言えば先史考古学・原史考古学・歴史考古学がある。

私が本学において採用しているのは日本考古学を中心にしてはいるが、必要に応じて、というよりも日本との関連において、例えばシルクロードの遺跡や、中国の都城、韓国の古墳・寺院跡などを取り上げて解説することになっている。通年講義で年間三十週を基準にしているが、まず学年の始めに考古学の初歩的知識として、

I 考古学の定義

II 考古学の歴史

III 考古学の資料

IV 考古学の研究方法

V 考古学の時代区分

等の項目を掲げ、基本的なことから理解させることにとめた上で、1 旧石器時代、2 縄文時代、3 弥生時代、4 古墳時代、5 歴史時代、という、日本考古学の時代区分に従って、各時代の主要な事項と問題点を概説することになっている。また、最近のように遺跡の発掘調査がさかんに行なわれ、日々さまざまな遺跡・遺物の発見がつついていく状況の中で、考古学が社会の中でどのような役割を果たしているかということについて考えることも大切であり、トピックとしてこれらのニュースをとり上げ、解説を加えることにしている。

ここで一つ取り上げて考えて見たいこととしてテキストの問題がある。全国各大学で行なわれている考古学の講義に、どのようなテキストが使用されているのか、その実態を調べた資料は寡聞にして知らない。日本考古学の歴史をふりかえって見ると、大学の講義のために編さんされた概説書や、普及啓蒙のための書籍もいくつかが刊行されている。しかし、考古学の専門家を養成する大学は別として、本学のように、専門科目

と言っても一般教育的な内容の強い講義に使用できるテキストというのは、はっきり言って皆無に等しい。

日本考古学が急速な発展を遂げると共に、めざましい躍進ぶりを見せ、その業績を物語る幾多の専門書・報告書が刊行されていながら、「教養としての考古学」といった内容の書物がつくられていないのである。このことは、先にも述べたように、日本考古学の歴史が、研究と発掘調査の歴史なのであって、考古学教育という言葉がないことで示されているように、教育という側面はあっても、考古学者すなわち専門家の養成に重点がおかれて来たのであって、考古学に関心を持つ一般の人びとや、私がいまここで考えているようなふつうの学生を対象とした教育、私という「考古学教育」という側面が欠如しているということと無関係ではないのである。

少し脱線してしまったが、こうした現状の中にあって、本学のこの講義で私がテキストとして採用しているのは、小林行雄博士の『日本考古学概説』（創元社）と、大塚初重・戸沢充則・佐原 真氏の編著にかかる『日本考古学を学ぶ(1)』（有斐閣）である。前者は、今さらここで紹介するまでもなく不朽の名著として知られ、昭和二十六年の初版以来、昭和五十九年で三十三版という版が重ねられているのであり、おそらく全国の各大学でテキストとして採用されている書物のベストセラーであろう。小林行雄博士の学風とも言える堅実な思考と親切的配慮で、各時代・各項目ごとに実測図がのせられ、詳細な参考文献が掲げられていて申し分のないテキストであるが、惜しいことに縄文・弥生・古墳の三時代に限られ、旧石器時代と歴史時代がない。小林博士がこれを執筆されたのは昭和二十六年以前であり、それから三十有余年を経た今日とは格段の差がある。今日の知識・情報の上に立つて、旧石器時代・歴史時代をふくめた改訂版を執筆していただく希望を持っているのは私一人に止まらないであろう。

これに対して、後者は初版が昭和五十三年であるが、旧石器時代から歴史時代に及ぶ各時代にわたって、日本考古学の諸問題を複数の執筆者が分担して要領よくまとめられている。ただこれだけの内容を理解するためにはかなりの能力が必要であり、私が考えているような「教養としての考古学」のテキストとしてはやはり難解である。もうかなり前のことであるが、こうしたテキストのことについて佐原 真氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長）と話す機会があったが、佐原氏もまったく同感で、「それは藤井さん自身が書いたら……」という言葉をもたらした。私自身としては、とてもその任ではないが、毎年の学年始めに痛切に感じるこの一つである。

いま一つ、この講義に関連して、私が担当して以来、前期の課題として夏期休暇を利用して「ある地域の考古学」に取り組ませ、四〇〇字詰

原稿用紙一〇枚のリポートを提出させることにしている。本学の学生は大半が京阪神地方の在住者であるが、北海道から沖縄まで全国都道府県に及んでいる。このテーマは、それぞれ学生各自が在住地の遺跡・遺物に接し、各地域の中で考古学の資料が歴史を組み立てるのにどのように役立っているかを考えさせることを目的としている。また国内・国外を問わず休暇中に旅行に出かける学生については、旅行先で遺跡を一カ所でも二カ所でも現地に行ってみることに、さらに各地域での資料館や博物館を見学することをすゝめ、この見学記をリポートにすることも合わせて課題の一つとしている。過去十年間これを続けて来たが、中にはすばらしいルポルタージュを書く学生もあり、リポートと共に提出された写真や図版は、保存して資料として活用している。

2 考古学特講

考古学概説を受講した上で、さらに考古学に強い興味と関心を持っている者に対して用意している科目で、内容は主として私自身が日ごろ研究のテーマとしている諸問題を中心に講義している。過去に取り上げて来たテーマを列記すると次の通りである。

年 度	テ ー マ
昭和五二年度	仏教考古学の諸問題
〃 五三 〃	古代寺院と古瓦
〃 五四 〃	寺院・荘園の四至と勝示
〃 五五 〃	日本の考古学史
〃 五六 〃	〃
〃 五七 〃	歴史時代考古学の諸問題
〃 五八 〃	〃
〃 五九 〃	都市の考古学
〃 六〇 〃	物流の考古学

ちなみに、今年のテーマを紹介すると、「古代日本の金石文を読む」と「近世考古学の展望」の二本立である。「古代日本の金石文を読む」は、古墳出土遺物、奈良・平安時代の造像銘、石碑、銅鐘、経塚遺物等に刻まれている金石文十二例（別表）を取り上げ、学生二人をコンビと

して、これについてあらかじめ調べさせ、銘文の読解と遺品についての解説を発表させることにしている。特講というよりも演習に近い内容であるが、金石文はもとより、漢字・漢文に親しませる教材として好適であり、学生達に評判が良く、真剣に取り組んでくれている。なお、夏期休暇の課題として、学生自身が、身近かなところにある金石文を何か一つ採訪・調査して来ることとし、後期にはそれを教室で発表・紹介させる予定である。

「古代日本の金石文を読む」教材一覧表

名	称	年	代	所在	種類	名	称	年	代	所在	種類
1	隅田八幡宮所藏人物画像鏡	允恭天皇六年	443	和歌山	鏡鑑	7	多胡碑	和銅四年	711	群馬	石碑
2	稲荷山古墳出土鉄剣	雄略天皇	471	埼玉	鉄剣	8	太安万呂墓誌	養老七年	723	奈良	墓誌
3	野中寺所藏弥勒菩薩像台座	天智天皇五年	666	大阪	仏像	9	多賀城碑	天平宝字六年	762	宮城	石碑
4	薬師寺東塔婆	天武天皇八年	679	奈良	塔婆	10	興福寺南円堂銅燈籠火袋	弘仁七年	816	奈良	燈籠
5	山ノ上碑	天武天皇十年	681	群馬	石碑	11	道澄寺銅鐘	延喜十七年	917	奈良	梵鐘
6	那須国造碑	持統天皇三年	689	茨城	石碑	12	小町塚経塚出土瓦経	承安四年	1174	三重	瓦経

本学では、四回生になると卒業論文の指導教授を学生自身の選ぶ題目に従って決定し、ゼミを編成することになっているが、例年の史学科藤井ゼミ、すなわち主として考古学を中心とした題目を選んで卒業論文を作成する学生の大半は、この考古学特講の受講者である。

3 考古学実習

考古学の学習は、教室での講義だけでなく考古学に関する野外・室内での実習が不可欠である。それは考古学という学問そのものが遺跡・遺物を対象として歴史を組み立てることが本来のすがたであるからである。発掘調査はもとより、野外に所在するさまざまな遺跡・遺物の調査を通じて、それを資料化するという独自の研究方法を持っているのであり、そのための技術の習得が必要なのである。

現在、全国の各地で発掘調査が行なわれているが、その大半は開発事業に対処して実施されている、いわゆる行政調査であり、考古学の技術

習得のために発掘調査を行なうということはほとんど不可能に近い。こうした状況の中で発掘技術を習得させるためには、学生自身が何らかの形で発掘調査に従事させることが早道である。こうした観点から、本学においても、考古学の受講学生のうち、希望者に対しては、積極的に参加することを呼びかけて来た。学生自身の縁故や、私に要請があったり、私と縁故のある教育委員会にお願いして過去十年の間多くの学生が発掘調査に従事して来た。昭和五十一年度の三重県四日市市での遺物の整理作業、昭和五十二年、五十五年度における箕面市如意谷遺跡のように、私自身が調査員として従事した発掘調査への参加もある。また、昭和五十五・六年の大坂城三の丸跡の調査や、昭和六十・六十一年の有岡城跡・伊丹郷町の調査のように本学が主体となつて行なう発掘調査は絶好の機会である。その他、昭和五十八年度には、岐阜県土岐市に所在する高根山古窯跡群の調査、昭和六十年には愛知県愛知郡日進町に所在する岩崎城跡の調査に、それぞれ地元の関係機関の要請によって専攻学生を派遣した。

これら発掘調査への参加は、考古学の技術を体得する上において又とない機会であり、今後より充実させて行かなければならないことの一つであると思う。

ところで、教室での考古学実習は、現在のところ、遺物の実測に重点をおき、作図の初歩的技術と、拓本の技術を習得させることを中心に年間計画を組んでいる。さらに、野外調査の一つとして、夏期休暇を利用して、一つのテーマによる調査を兼ね合わせ、史跡・文化財の見学をふくめ合宿による研修旅行を実施して来た。

昭和五十八年度 香川県の古瓦調査

香川県の古代寺院跡と古瓦は、私にとっては学生時代からの研究テーマでありフィールドであるが、学生の古瓦に対する知識と、その観察・記録、それに拓本の技術を習得させるため、坂出市の鎌田共済会郷土博物館、坂出市立博物館、木田郡牟礼町の洲崎寺（故御城俊禪氏の収集資料）、大川郡寒川町教育委員会にそれぞれ収蔵されている古瓦資料を中心に調査を行なった。

昭和五十九年度 大津市膳所縁心寺本多家墓所の実測調査

本学の史学研究所は、昭和五十五年の創設以来、伊勢神戸藩主本多家に関する調査と研究を進めている。私自身も、本多家に係わる遺跡と遺物の調査・研究の仕事を分担しているが、そこで思いついたのがこの調査である。近江膳所藩主の本多家は、神戸侯からいえば本家に

当たるが、歴代藩主の墓所は菩提寺である縁心寺に所在している。元は靈屋たまやを備えた立派な墓所であったが現在は随分荒廃している。

この墓所について、平板測量による平面図の作成と、歴代各墓所について平面図・立面図の作成を作業として行なった。なお、この年度では未完であるため、今年の九月にさらに追加調査を行ない完成させる予定である。

昭和六十年 愛知県宝飯郡小坂井町 本多家墓所の調査

本多家といえは、徳川四天王とよばれた本多忠勝が徳川家康に重用されて以来、譜代大名として発展した名族である。膳所藩主とその分家に当たる神戸藩主の直接のご先祖は、戦国時代末期に三河国伊奈城主となった。この時期三代の墓所が愛知県宝飯郡小坂井町伊奈の地にあり、「お松見しゅうけん」とよばれている。八月に二班に分かれて現地へ赴き、墓所全体の平面図の作成、各墓所の平面図・立面図をそれぞれ作成した。

本題とははずれるが、こうした近世における大名家の墓所は全国各地に所在している。各地方の歴史を物語る史跡として、地方史誌に収録されているが、あまりにも対象が多いためなのか、近世そのものが等閑視されているのか、考古学の対象として大名家の墓所を取り上げた調査・研究は数えるほどしかない。⁽¹⁾

かつて東京都港区芝の増上寺にあった徳川將軍家の靈廟が発掘されたことは有名であり、大部な報告書が刊行されている。⁽²⁾ また、仙台市靈屋下に所在する伊達政宗公の靈廟瑞鳳殿と、二代忠宗・三代綱村の墓所も再建復興に先立って発掘調査が行なわれた。地方の大名家としては、他に東京都港区三田済海寺さいかいの越後長岡藩主牧野家墓所、岡山市国清寺の備前岡山藩主池田家墓所等の調査例があるが、発掘調査をまつまでもなく、大名家の墓所を調査することは近世考古学の一分野として不可欠の作業であろう。

私としても、本多家とのかかわり、本多家墓所調査の機縁から近世大名家の墓所の調査・研究に関心をいただいているが、稿を改めてその問題点を指摘したいと思っている。

註

(1) 伊東信雄氏「大名の墓」『季刊考古学』第九号、昭和五九年一〇月

(2) 鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行編『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』(東京大学出版会、昭和四十二年)

四 大手前女子学園による発掘調査

1 大坂城三の丸跡

昭和五十五年四月、わが大手前女子大学の学長に日比野丈夫先生が赴任された。これに先立つこの年の二月より五月にかけて、当初日比野先生から藤井健造理事長へのご依頼により、私が担当者となって行なったが、大阪市東区京橋前之町、追手門学院大手前高等学校・中学校の校舎改築に伴う発掘調査（大坂城三の丸跡京橋口地点）である。当初から大坂城跡を対象とする考古学的発掘調査としてははじめてのケースであり、その後における大阪市教育委員会の行政指導や、大坂城三の丸跡および出土遺物の調査研究に画期をもたらしした意味で大きく評価されている。

つづいて昭和五十六年には、足許である大手前女子短期大学の校舎（現在の学園本部、大手前学舎B棟）増築に伴う発掘調査（大坂城三の丸跡大手口地点）がある。学園として徹底的に調査を行なうという藤井健造理事長の方針に従って、日比野丈夫学長を委員長とする校地学術調査委員会を組織し、建設工事に先立って実施した。

この二年度にわたる発掘調査のくわしい報告書は、昭和五十七年三月に『大坂城三の丸跡Ⅰ』、昭和五十八年三月に『大坂城三の丸跡Ⅱ』として刊行した。また、発掘調査の所見は、日本考古学協会総会において発表し、いくつかの論考をまとめたほか、依頼を受けて紹介記事を書いた。さらに特筆すべきことは、昭和五十七年十二月に竣工した短期大学の新しい校舎に、京橋口・大手口双方の調査資料と出土遺物を収蔵・保管すると共に、展示・公開する施設として、ささやかではあるが「考古資料室」が設けられたことである。

先にも記したように、広大な大坂城跡を遺跡としてとらえ、考古学的方法による発掘調査を行なったのはこれが最初のケースである。もとより大坂城跡が考古学でいう遺跡であることについての認識がなかったわけではないが、近世という時代の遺跡・遺物に対する学界、行政担当者の取り組み方が活ばつになって来たのは、全国的に見てもここ数年来のことである。とくに大阪の場合、大坂城の周辺には難波宮跡がありその調査保存に大きな成果を上げて来たが、かえってこれとは裏はらに、難波宮跡という古代の遺構を追跡することに主眼がおかれ、その上層に当

然存在したはずの、中世の石山本願寺、近世に入っの豊臣時代および徳川時代の大阪城に伴う遺構・遺物を無視して来たのである。そうした意味で、私たちの調査は、それ以後相次いで行なわれた、大阪市文化財協会による法円坂町での発掘調査や、追手門学院大手前小学校の校舍改築に伴う発掘調査、さらに大阪府教育委員会による大阪西町奉行所跡の発掘調査等、大阪市内における近世城館・都市遺跡に対して、府・市の文化財行政が前進する先蹤的役割を果たすことになったといふことができるのである。

さらに言えば、近世の大阪城跡の出土遺物についても、それまでは、わずかに金箔瓦だけが研究の対象として取り上げられるに過ぎなかった。出土する機会があっても注意することなく捨て去られて来たからである。京橋口・大手口の二地点とも、豊富に遺物を包含する遺構に出くわし、豊臣時代大阪城の終焉となった落城直後に掘さくされた土壙や地表面から、陶磁器・木製品等、この時代の生活・文化を物語る遺物を大量に得ることができた。とくに両地点の陶磁器の資料は、当代における生産地と消費地との密接な流通を物語るものであり、慶長二十年（一五二六）の落城時を一つの基準として、編年作業と、丹波焼・備前焼を主とする焼締陶器、美濃・瀬戸焼と唐津焼を主とする施釉陶器、それに中国製の磁器をふくめてセット関係をとらえる上で重要な資料を提供することになった。

二年度にわたる現場での発掘調査から、出土遺物の整理、実測、トレース、さらに報告書の刊行に至るまでの作業には、もちろん大手前女子大学・大手前女子短期大学の学生が多数参加した。前記二冊の報告書と考古資料室は、土と汗にまみれて作業を進めてくれた彼女らの献身的な努力のたまものなのである。

なお、毎年七月の中旬に実施される本学の博物館実習には、その期間中の半日を宛てて、考古資料室において、収蔵資料を利用して実施している。

2 有岡城跡と伊丹郷町の調査

大手前女子短期大学のキャンパスが、伊丹市稲野に移転することに決まったのは、昭和五十八年七月ということである。この校地になるところに、かつて「温塚（ぬくめづか）」とよばれる一基の古墳が存在していた。伊丹市教育委員会の要請により、校舎の建設に先立って敷地内の試掘調査を行なったが、古墳の墳丘は阪急伊丹線の敷設に際して削り取られ、その後における工場建設によって痕跡すらとどめていないことがわ

かった。この温塚古墳をふくむ古墳群のこと、伊丹キャンパス周辺の考古学的環境について概観したのが、拙稿の「稲野の歴史―短大校地とその周辺―」（『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院研究集録』所収、昭和六十一年四月）である。

ところで、私自身が文化財行政の窓口である伊丹市教育委員会社会教育課の方がたとつながりを持ったのはこの時が最初である。昭和六十年四月になって、社会教育課長の大沢欣也氏と、旧知の同課嘱託浅岡俊夫氏の訪問を受けた。用件は、伊丹市北本町一丁目で三井建設株式会社が建設を計画している高層住宅の建設予定用地と、これに隣接する敷地の発掘調査を担当してほしいということであった。

伊丹市の中央部には、中世に在地の土豪として勢力を持っていた伊丹氏の居城伊丹城跡と、この伊丹氏を滅ぼし、織田信長の輩下となって摂津国の守護に任じられていた荒木村重が天正二年（一五七四）に伊丹城を再構築して名を改めた有岡城跡がある。主郭部分は、明治三十七年に敷設・開通した阪鶴鉄道（現在の国鉄福知山線）で大半が失われてしまっているが、西側の一かくがのこり、昭和五十年以後、駅前整備事業に伴う調査が実施されて来た（伊丹市教育委員会『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』、同『有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ』）。

この有岡城は、南北に長く延びる洪積層から成る伊丹台地の地形を巧みに利用し、北は、現在、猪名野神社の境内となっている「岸の砦」から、南は「ひよどり塚砦」に至る台地の縁辺に沿う線を限って「惣構」とし、主郭を中央部の東寄りに置き、周囲を土塁で囲むという、日本城郭史上はじめての惣構をもつ堅固な構えをもつ城であった。

天正七年（一五七九）、有岡城は織田信長に攻められて落城したが、惣構の中にふくまれていた商工業者の町が発展して江戸時代以後の伊丹郷町が形成されたのである。

こうした歴史的経過と構造上の特徴から、有岡城跡を遺跡として考古学的にとらえる場合には、惣構の範囲内のすべての区域が対象となるのであり、近世の伊丹郷町を合わせて、広大な城館・都市遺跡といえることができる。伊丹市教育委員会の文化財行政は、こうした認識に立って、公共・民間を問わず、区域内の開発行為に対して、事前に発掘調査を義務づけるといふ程徹底しているわけではないが、これに近い指導は行われている。

今回依頼を受けた調査もこうした動きの中でのケースで、その意向に沿って私が調査担当者となって「有岡城跡調査会」を編成し、昭和六十年五月の下旬から、途中二カ月を除いて十二月末に至るまでの六カ月間、約四四〇〇平方メートルの区域を対象とする発掘調査を実施した。

これとは別に、伊丹市当局では、かねてより国鉄伊丹駅西方の敷地一六八〇〇平方メートルを対象として、駅前再開発事業が計画されている。これは、計画区域内の既存家屋を撤去した上で高層住宅を建設するという事業である。もとよりこの全域が有岡城跡の中にふくまれているから、工事に先立って発掘調査を行なう必要がある。この調査についてご相談を受けたのが昭和六十年十二月のことであった。伊丹市当局による公共事業という対外的な要素と、面積から言っても、時日や経費から言っても大規模な発掘調査になることが予想された。このため、私が担当者ではあっても、大学または学園としての組織をつくって対処していただく必要を感じ、日比野学長ならびに福井学園本部企画部長と再三にわたってご相談した。藤井健造理事長の「他ならぬ伊丹市からのご要望であり、学園あげて協力するよう」という基本方針を体して「大手前女子学園有岡城跡調査委員会」を組織し、昭和六十一年二月末から調査を開始した。十月末現在、調査は大詰を迎えているが、当初から危惧していた通り調査対象面積に対して、調査期間が十分に確保されておらず、加えて文化財保護行政を担う教育委員会よりも開発部局の意見や力が大きいという困難な条件の中で、調査を運営する責任をもつ担当者として、煩悶の日々が続いた。

伊丹城・有岡城の歴史と遺跡の現状、これら二次にわたる発掘調査の概要は、四月二十八日に挙行された短大伊丹キャンパスのオープニングフェスタに合わせて刊行した『有岡城跡と伊丹郷町』で紹介した。

調査を進めるに当たっては、市教育委員会のご斡旋で国鉄伊丹駅東口前の市有地を提供していただき、ここに二棟のプレハブ建築を建て、事務所と作業場および出土遺物の収蔵庫としている。こうした長期間にわたる大規模な調査を実施するためには、強力な調査チームの編成が不可欠である。今回の場合、幸いなことに好条件にめぐまれ夏期休暇の期間に当たったことからそれを最大限に利用して調査が進行している。

現場での作業は、この調査を機会に大手前栄養文化学院に採用してもらった川口宏海講師と、中学校在学当時から付き合いのある名古屋大学文学部大学院博士課程在学中の前川 要君を主任調査員としている。この下に、卒業以来考古学関係の仕事が続けて来た、十五期生の細川佳子さん、十六期生の萩野典子さんをキャップとして、考古学研究会のメンバーをふくむ三回生・二回生を配属した。発掘調査の作業は、重量を伴うこともあり男子学生も必要であるが、今回は大阪教育大学・大阪商業大学の諸君が参加してくれていて心強い。細心の注意を必要とする遺構の検出や、実測の作業など、女子学生にはその力量を発揮できる好適のフィールドであり、この調査を取り巻く社会的条件はきびしいが、めぐまれた考古学実習の場となっていることはそれなりに大きな意味を持っている。

これに合わせて、昭和六十年年度調査の遺物整理と実測の作業、ならびに日々現場から運ばれて来る出土遺物の洗滌と注記の作業などを行なう内業の部門がある。これには、現場での調査に従事してもらった松田訓祀君の企画の下に、藤本史子さんと、十五期生の岩谷奈津子さん、十六期生の木本由恵さん、姫路真保さんをキャップとして、指導に当たり、希望者を募集して参加をよびかけた女子大学の一回生と、短期大学・栄養文化学院の一・二回生諸君によって進めた。

発掘調査の体制はさまざまであるが、ふつう現場での発掘調査に時間と労力・経費がかさみ、現場が終了してからの内業の体制がととのわなために遺物の整理作業が進められず、報告書の刊行が遅れたり、刊行されても遺物について十分な考察が加えられていない場合が多い。私の基本的姿勢は、常に外業と内業を併行させることを目標にしており、それを実践して来たが、学校が一つの単位となつて行なう調査ではこれに關しては大きなメリットがある。とくに本学のように女子大学である場合は、こうした利点を最大限に生かすことができるのであり、めぐまれた条件といふことができるであろう。かつて、大坂城三の丸跡調査の報告書を矢つぎ早に二冊刊行できたのもこのためである。

女子学生の集団は、友達関係やグループ単位であることが多く、横の關係が密接であっても縦の關係がつくりにくいとされている。学内において日々の学生の動きを見ていると正にその通りであるが、私は敢えてこれに挑戦し、発掘現場でのチーム編成やクラブ活動の指導に当たっては、たとえ女子であっても縦の關係を形づくらせることに力を入れている。幸いこれが功を奏し、私の意図を汲んでくれている主任調査員と先輩諸君のよき指導でこれがうまく回転し、調査が円滑に進んでいることは最大のよろこびである。

今後、大量の出土遺物の整理作業と合わせて報告書の作成・刊行の仕事がのこされている。

五 これからの大手前考古学

大手前女子大学における考古学教育十年の歩みとしては、昭和五十一年の十月に、史学科十期生の諸君によって結成され、今日まで十年の歴史を持っている考古学研究会の活動がある。また、在学中に発掘調査に参加する機会があったり、アルバイトで考古学關係の仕事に参加した経験を生かし、これがきっかけとなって考古学への興味を持ち、卒業後も、都道府県や市町村教育委員会で關係の仕事に従事している卒業生の動

向もある。

これらのことについても記しておきたいことは多いが、も早予定の枚数をこえたので機会を改めることとし、過去十年の基礎の上に立って、これからの方向について、日ごろ考えている構想を記して本稿のしめくりとしたい。

今にはじまったことでは決してないが、発掘調査のブームを反映してか、また全員ではないにしても、本学史学科の学生の考古学への関心度は、私が見る限りにおいて高いと言える。このことは、毎年の入学試験の面接で「史学科に入って何を専攻したいですか」という質問に対して、「考古学をやりたいと思います」と答える者の多いことから裏付けることができるであろう。果たしてこの時にそのように答えた者が、入学後どのような進路を歩んでいるのか、残念ながら追跡していないが、これが本学の一つの傾向であったとしたら、担当している私にとってこれ以上の喜びはない。そして、こうした希望を持っている学生に対して、その希望に応えるための教育活動を展開することが、私に課せられた責務であることを痛感する。

考古学と言っても守備範囲は広く、とくに最近においては理化学的分野の採用や、学際的な研究活動もさかんである。私自身の専攻は日本考古学、その中でも歴史考古学の分野であるから、考古学概説は兎も角として、考古学特講の内容は敢えて歴史考古学に重点を置いて来た。最近における若い世代の人は、漢字や漢文の読解力に乏しいとよく言われるが、歴史考古学の分野は文献の跋渉が必要不可欠の条件である。そうした意味で、考古学を専攻する学生には文献資料に親しみ、これに取り組むことに重点をおく指導をつづけて行きたいと思っている。

すでに述べたように、私をふくめて本学として幸であったことは、大坂城三の丸跡にはじまり、短大の伊丹市への移転・開学が機縁となって有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査を主宰し、その調査資料にめぐまれたことである。ともに中世から近世にかけての城館・都市遺跡である。こうした城館・都市遺跡への考古学からのアプローチは、まだ時日が浅く、研究方法も十分に確立されていないが、中世・近世にとどまらず、近代―明治・大正時代をふくめて、その調査研究の方法を模索し、それを試みる上で絶好のフィールドといえることができるであろう。大坂城三の丸跡の陶磁器・木製品はすでに学界共有のものとして関係の方がたに広く知られている。有岡城跡・伊丹郷町の出土遺物、それは文字通りの「瓦礫」であるが、これまでの調査資料が十分に公開されていないこともあって、重要な資料として評価されることが予想される。さらに、屋瓦・陶磁器・土器を主とする出土遺物は、古文書・記録には見ることでできない中世の有岡城の城下と、近世にはじまって近代から現代へとつづく

考古学教育の十年

伊丹郷町の生活・文化の様相と物資の動きを知ることのできる資料としても貴重である。

伊丹市における発掘調査は、今後も何らかの形で続くことが予想されるが、これらの資料を収蔵・展示できる施設と、遺物整理を進めるセンターとしての役割をもち、考古学の学習に不可欠な実習室が学内のどこかにできたらという願いをこめて筆をおくことにしたい。